

2024年11月15日

セルロイドサロン

第255回
岩井 薫生

セルロイド産業文化研究会の25年の歩み

日本は正倉院や法隆寺のように非常に古いものは大切にしますが、30年前、50年前のように近現代には関心を払わないことが多いという傾向があります。

世界で最初の合成樹脂であり、生地製造・加工を問わず20世紀にかけて日本を代表する産業であったセルロイドについても同様にセルロイド産業文化研究会を発足させた2000年頃には過去の遺物として忘れられようとしていました。

その当時アメリカから一通のメールが届きました。セルロイドの調査と研究を行っている米国のプラスチック博物館を運営しているセルロイド産業史研究と同時にコレクターであるラウエル氏という方からでした。日本側の研究調査グループを捜しているとの内容でしたが、それなら私達が調査の一端を引き受けようではないかと機が熟し関係者一同が意気投合して研究会を発足させる段取りとなりました。

セルロイドは最盛期には25,000種以上もの製品が製造されるという一大産業でした。特に日本は世界中の生地の40%を製造するという中心産業で、各国の首脳が日本に立ち寄った際には工場の視察を行ったほどでした。

そのセルロイドが忘れられようとしているという現状を観るにあたって何とか次世代に産業文化遺産として引き継ぐものを遺そうと集まった設立メンバーは、セルロイド生地製造を行っていた人達、加工業者、関心を寄せていたもの等様々でしたが、既に現場を離れている人や無関心の方や今更取り上げるべきテーマでもないだろうと消極的な人もいて出だしは順調な船出ではありませんでした。

発足したセルロイド産業文化研究会は2000年に第一回のカンファレンスを開催したところセルロイド関係者、愛好者等が五十名以上集まるという盛況となりました。その後カンファレンスは集いと名を変えて現在に至るまで開催され毎回各講師による充実した内容の講演が行われています。

この会議と並行する形でホームページ上 (www.celluloidhouse.com) にサイトを開設し四方山話を集めたサロンは200回以上のロング掲載となって好評を博している他最新の研究調査報告等を随時掲載しています。

25年にわたり資料収集等にも力を入れ継続的に活動を続けたところセルロイド生地、製品、金型、ポスター、書籍等約十万点が集まりました。

このコレクション及び資料等を2005年に横浜市の旧大日本樹脂研究所(現DJK)の建物を改装して常設展示施設するセルロイドハウス横浜館がスタートしました。

この建物は私どもの活動の出発点と言えるもので合成樹脂の草分けであるセルロイドを展示するに相応しい場所で数多くの方々にご観覧をいただきました。

残念ながら横浜のこの展示施設は老朽化により本年2月に取り壊されましたが、コレクションの一部が大阪セルロイド会館に寄贈され一室に展示されています。

千葉県野田市の保管庫に移動したセルロイド製品等コレクションは近い将来埼玉県の大宮地区に建設予定の施設に移設する計画があります。

長年の活動のなかから、2010年にはセルロイドが日本化学会の化学遺産第009号に認定されるという嬉しい知らせもありました。

近年「環境に優しい」という言葉がよく使われますがセルロイドは、その後登場した様々なプラスチックが石油由来のものであるのに対してセルロースや樟脳など自然由来の材料です。今日生分解性樹脂の開発やバイオマス由来の新規材料の研究開発が進められていますが、セルロイドは熱可塑性樹脂の原点として位置づけられています。

セルロイドはコレクターだけでなく多くのファンの方々にとり極めて魅力あるコレクションアイテムの一つでしょう。

セルロイドは手触りの柔らかさ、色合いの鮮やかさなど多くのすぐれた特徴があります。それゆえに往時を知る人には懐かしく、知らない人にも極めて新鮮に映ります。

これまでの私たちの活動が25年を迎えることが出来たのも多くの関係者の皆さん方のご協力と温かいご応援と私たちの発足当初からの変わらない熱意の相乗積の賜物といささか自負しています。

最後になりましたが、これまでの長い期間私達を支えていただいたセルロイド産業文化研究会のメンバー、大阪セルロイド会館の歴代の理事長、理事や事務局のメンバー、私共の活動を陰ひなたなく応援してくださった方々に心よりの御礼を申し上げるとともに残念ながら鬼籍に入られた方々に深く哀悼の意を評してご挨拶を終わらせていただきます。

セルロイド産業文化研究会創立時以来メンバー 岩井 薫生 (いさお)
大井 瑛
松尾 和彦
三木 弘司
小野 喜啓